



幸せのなる木



川路 新吉

幸せのなる木

「できたぞ〜〜〜」

助手のタナカが、同僚のサトウの新婚生活を茶化していると、隣の実験室からすつとんきょうな声が聞こえてきた。

「博士がまたくだらないものでも発明したんだろうよ」

いつものことだとタナカは無視しようとした。しかし、茶化しすぎてしまったか、うんざりしていたサトウがこれ幸いにと実験室に向かったので、タナカは仕方なくついていくことにした。

「なんだこりゃ」

実験室のドアを開けるとそこには奇妙なものがあつた。部屋の中央にこんもりと何かが積み上がっている。中に人がすっぽりと入ってしまいそうなほどの大きい。

「いったいどうしたんだ、これ」

「タナカさん、ちょっと見てくださいよ」

サトウが積み上がったものの一部を手にとって、驚いた顔でタナカに見せた。

一万円札だった。タナカは山のほうへ視線をもどした。目の前にあるのは文字通り山のような一万円札だった。

「どうじゃ、すごいじゃろう」

部屋の奥、一万円札の山の向こうから博士が現れた。

「いったいこれはどうしたんですか？博士」

「よくぞ聞いてくれた」

博士は一万円札の山をかき分け、山のちょうど中心あたりから鉢植えのようなものを取り出した。一本ひよろつとした幹が鉢から生えている。

「これじゃ」

「鉢植えですか？」

「ああ、とうとう金のなる木を発明したんじゃ」

「金のなる木？」

よくみるとひよろつと生えている幹からは、たくさんの細かい枝が伸び、その先に一万円札が付いているものもある。

「じゃ、この金は全部その鉢から生えたんすか？」

「ああ、そうじゃ。昨日の晩に種を植えて水をやって今朝来てみたらこうじゃ」

タナカはあらためて目の前の1万円札の山を見た。

「信じられないです」

となりでサトウも呆然としている。

確かにとても信じられる話ではない。しかし、目の前の光景はそれが現実であることを物語っている。

その二人の様子を満足気にみていた博士が言った。

「欲しいか」

二人の目の前に差し出された博士の手にはへんてつもない小さな種があった。

「マジっすか？」

「いいんですか？」

「ああ、いいとも。今日のわしは太っ腹なのじゃ」

次の日、博士が実験室で昨日手に入れた一万円札を数えていると、タナカが部屋に駆け込んできた。

「大変っす、博士」

「どうしたんじゃ」

「昨日もらったあれ、金のなる木なんかじゃないっす」

「なんじゃと。金は、一万円札は実らなかったのか」

「ええ、博士のときみたいにお札は実らなかったんすけど、別のものが実ったんす」

「べつなもの？なんじゃ」

そこで一瞬タナカはすこし恥ずかしそうな顔をした。

「美少女フィギュアが」

「美少女フィギュア？」

「じつは俺、美少女フィギュア集めるの趣味なんす。その資金に当てようとおもって鉢に種を植えたんすよ。そしたら朝起きたらすごいことになっていて」

タナカの部屋には、昨日の一万円札と同じように美少女フィギュアの山ができていたという。

「いったいどういうことじゃ」

博士はうでを組んだ。金のなる木を発明したと思っていたら、タナカが植えたら金ではなく、美少女フィギュアが実ってしまった。

「ひょっとして、植えた人間が一番欲しいものになる木なんじゃないですか？」

「なるほど」

「ま博士の場合はお金が欲しかったからお金が実った」

「お前の場合は美少女フィギュアが欲しかったと」

どうやら、自分の発明は想像以上のものだったようだ博士は思った。

「お金で買えない幸せもある、なんてかっこつける奴もいるが、そういう奴にとってもちゃんと望むものが実るというわけじゃ。言ってみれば、幸せのなる木じゃな」

「そうっすよ、すごい発明っすよ」

二人は興奮した。世紀の大発明だ、と二人は抱き合って喜び合った。

ひとしきり喜ぶと博士がふと思い出したように言った。

「ところで、サトウくんの木には何が実ったかの」

博士のその言葉に、それまで興奮していたタナカはふと我に返った。

「どうしたんじゃ？」

見るとタナカは青ざめている。

「非常にまずいっすよ」

自身の望むものが、文字通り山ほど手に入れられるというのに何がまずいのか。不審に思っているとタナカが言った。

「サトウの奴、昨日言ってたんすよ。ぼくはひとりっ子でさみしかったんでたくさん子供が欲しいです、って」

幸せのなる木

<http://p.booklog.jp/book/38671>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38671>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38671>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.